

「一期一会を大切に」

都立西高等学校 2年 鈴木結衣

新天地での生活が人生の再スタートだとしたら、私は何回生きればいいのか。

国内五回、海外二回一父の仕事の都合で私が経験した引っ越しの数だ。幼い私は、仲良しのあの子と、住みやすいこの街となぜ別れなければならないのか困惑した。また一からその地域の方言や食べ物、『常識』に慣れなくてはならない。怒りの矛先は時に父に向かった。

直前の引っ越しは二年前。高校の入学を機に三年ぶりに日本の土を踏んだ。今や引っ越しは昇り続ける日と同じで、私の気持ちと関係なしにやってくる。

人間関係を観察して、どこに入ろう、どんなキャラを演じよう一幾度と重なる引っ越しで手に入れた処世術。数年の辛抱だ、その場に応じた性格で生きよう。最初は難しかったがこれで切り抜けてきた。

旧友から年賀葉書が来る正月は大変だ。どんな子だっけ、『その子といる私』は？ウンウン唸って思い出して、わからない、ここは無難に近況報告と。そんなのばかり。

でも高校では皆スタートが同じだ。基礎の人間関係がない。いつもの様に、そこにある土台に乗るわけにはいかない、転校初心者だったかつての私以来、最大のピンチだった。

入学をして一年。正直、私はまだ環境になじめないでいた。直前まで海外で過ごしていたこともあるのだろう、そしてこれが父に付いて行く最後の引っ越しだということもある。これからの未来は、全てありふれた日常の延長なのかとぼんやり考えた。

ある晩。SNSを見て笑っていた私に、母が声をかけた。

「結衣は本当に校外の友達が多いね。これからも大切にしなさいよ。」

無音で白黒にさえ思われた高校生活が、鮮やかになって流れ込んできた。確かに、高校で人間関係を作るのが大変と言う割には、校外で何かのプログラムに参加すると、必ず大切な友達を見つける。思えば、今までの転校先でもそうだった。友達を作るのは妹よりずっと遅くて、でも最後に出会った日は覚えていないのに今でも葉書やSNSでつながる。看護師になりたい友達、女優になりたい友達、大家族のお母さんになりたい子もいた。夢は違えど、一人ひとりの固い信念にしばれた。時計の針が回るのにも気付かずに将来への希望、不安を語り合い、多くのことを学んだ。年賀状の返信が大変？それは未だに仲がいい証拠！それに気付いた私は、高二になってから校内はもちろん、行く先での人との出会いを大切にしようになった。

出会った仲間の一人はこの夏イギリスへ。一瞬で意気投合したのに、とても寂しい。出会うって難しいし、時に残酷だ。でも、この胸の痛みを知れば知るほど、私はまた成長できる気がする。そうやって、蛇が脱皮を繰り返すようにもろく傷つきやすい世界に出る。

まだ見ぬ世界で、自分と違う背景を持つ人と出会うこと、これが私の幸せだ。